
A Drowned Body

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A D r o w n e d B o d y

【Nコード】

N 3 0 6 5 Y

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

複数の名前を持ち、複数の男と関係を持っている女性。ある日、当の昔に捨て去ったはずの本当の名前を呼ぶ一通のメールが送られてきた。【毎週土日更新予定】

昔から、フルーツポンチが好きだった。

サイダーに浸かった色とりどりのフルーツ。

炭酸が染み込んだ果肉を口に含んだ瞬間の、あの痛いくらいの爽快
感。

ミカン、メロン、マスカットにピーチ。

とりわけ私はチェリーが好きだった――。

【秋穂？】

携帯電話のディスプレイに私の名前が映し出される。

私はその名前を知っている数少ない人間の顔を思い浮かべる。

茎を摘まんで熟したアメリカンチェリーを頬張ると、予想に反して
甘酸っぱい味がした。

昔、サイダーに浸けられていたそれは、今、シャンパンの味が染み
込んでいる。

「それ、好きだね」

シャワーから上がった渡部は髪をバスタオルで拭きながら、ベッドの縁に腰掛ける。

私はその綺麗な小麦色をした上半身を眺めながら微笑みを返す。

背中が隆起して、ホテルの少し暗めの照明に当てられ光沢を得ている。

「チェリー、そんなにおいしい？」

いたるところにキスをしながら渡部はそんなことを聞いてくる。

腰、背中、腕、胸、首筋、耳、頬。

私はくすぐったいキスに笑いながら舌を出す。

その上に、固結びされたチェリーの茎を乗せて。

「へえ、チカにこんな特技、あつたんだ」

渡部は私から視線を逸らさず、

「口の中でヘタを結べる人は、キスが巧いんだってね」

そう言いながら茎を摘まんで綺麗な灰皿の上に載せた。

「試してみる？」

私は挑戦的な目を向ける。

彼は一瞬、微笑んだ後、荒々しく私の唇を貪りはじめた。

A D r o w n e d B o d y 2

思い切りセックスしたら喉が渴いて、気の抜けたシャンパンを一息に飲み干した。

【秋穂だろ？ オレだよ、純也】

ソファに座り携帯電話を開くと、またメールが届いていた。

渡部の去った部屋は静かだ。

窓に雨粒が滴っているが、音はしない。

その気配だけが感じられる。

眼下では夜の街の灯かりが滲んでいる。

暖房が効きすぎて、頭がボーっとしている。

無意味なことを考えたい気分だ。

「アキホ…」

メールの文字を口にしてみる。

私の、最初の名前。

「純也」

その名前を最後に呼んだのは、いつだったろうか。

常に前を向いて生きて、だから過去を振り返ることなんてない。

いつも、今が精一杯だから。

でも今日は、雨が私を守ってくれている気がする。

外界の雑音が遮断され、私の好きなものしかない空間。

その中で少しでも無意味なことを考えてもいいような。

「純也…」

私はもう一度、その人の名前を口にした。

A D r o w n e d B o d y 3

2

週末の夜の、駅の雑踏。

行き交う人、人、人。

すり抜けながら歩く。

手を引かれていると、幼かったときの記憶が蘇る。

「冬美さん、大丈夫？」

無邪気に微笑む俊君の顔が、一瞬、純也のそれと重なる。

【秋穂なら返事をくれないか】

今日もメッセージが届いた。

純也からのメールは、あれからポツポツ届くようになっていた。

私はそれが日に何度も届くようになるのを恐れていた。

でも、それは杞憂だった。

彼からのメールは忘れた頃に届く程度で、私はそれを特に煩わしく

感じずにいられた。

「ここを抜ければ静かなところにでるからね」

優しい俊君は、雑踏を嫌う私を庇いながら歩く。

骨張ったとても大きな手は、私に少しでも安心して与えてくれる。

駅前通りを一本外れると、人通りは疎らになる。

「どこがいい？」

彼はホテルの看板に真剣な眼差しを向ける。

私はその横顔を見て微笑む。

滅多に見られない真剣な顔。

喋らなければいい男。

でも、話すとどこか頭のネジが飛んでいるような男。

私は俊君の、底抜けに明るい性格が好きだ。

いつもヘラヘラして、私の我がままを聞いてくれる。

「ちょっと空いているか見てくるよ」

そう言って彼は行ってしまふ。

私はホテルの門の前で、フラフラとした長身の彼の後姿を見守る。

こんなとき、私は怖くなる。

私は誰なのか。

チ力――。

――冬美さん。

もし、同時に声を掛けられたら、私はどちらに振り向くのだろうか。

渡部がこんな場所に来るはずがないとわかりつつも、そう考えてしまっ

同じ町に住んでいる。

だから、どこかで出くわしても決して不思議ではない。

そのとき私はどちらに振り向くのか…。

「冬美さん」

戻ってきて俊君は悩んでいる。

「どうしよっか」

世界で一番、考えることが苦手だという顔をする。

だから私は、笑って彼の手を引く。

「ううにんごう」

A D r o w n e d B o d y 4

俊君とのセックスはスポーツだ。

時間が許す限り、何度でも。

終わった後は、気持ちのいい汗をかいている。

急いでシャワーを浴びて、服を着て、清算を済ませ部屋を出る。

外に出たときには、少し息切れしていたりして、それが可笑しい。

きちんとゴールできたような爽快感があつて、お互いがお互いの顔を見て笑いあふ。

俊君の笑顔は、底抜けに明るい。

きっと、私が笑ってるから一緒に笑ってくれているんだ。

何も考えず。

私はそんな彼を、愛おしく思う。

「今度、いつ会える」

それは惜別の言葉ではない。

駅のホームまで送ってくれた俊君は、純粋な意味でそう聞いているに違いない。

「連絡する」

とだけ私は言う。

彼は引き止めたりしない。

電車がホームに滑り込むと、笑顔でバイバイする。

彼は私に手を振る。

とてもさっぱりとした表情で。

私はそんな彼のことを好ましく思う。

ドアが閉まり再び始動すると、彼はすぐ踵を返した。

【秋穂じゃないのか？】

夜の電車からは街の灯かりが見下ろせる。

移り行く景色。

家とビルと、少しの緑がある街。

渡部がいる。

俊君がいる。

私は一人じゃない。

だから、メールを返信する必要はない。

ないのだ。

A D r o w n e d B o d y 5

3

【俺は今、吉祥寺に住んでいる】

そんなメールを、井の頭公園を横切りながら読む。

【小さい頃、お前が住んでみたいと言っていた街だ】

思わず立ち止まる。

携帯を持つ手が震える。

同じ街に、純也がいる。

私はすばやく辺りに視線を送る。

ジョギングするマダム。

紙芝居をしているおじさん。

犬の散歩をしているおばさん。

連れ立って歩く大学生——。

きちんと成長しているのであれば、純也は今、大学生になっているはずだ。

【この街はいいよ。まだ緑が残っていて】

辺りにはそれらしき人物は見取れなかった。

たといいたとしても、私に十年後の彼を見つけることができるのだろうか。

そして彼に、十年後の私を見つけることができるのだろうか。

そんな疑問が浮かんでくる。

【十年前に二人で考えた将来設計通りの道を、俺は今、歩んでいる】

十年前、二人で描いた青写真。

私はそれを、かすかにしか覚えていない。

二人で好き勝手な願望を言い合った、取り留めのない時間。

【計画通りでないのは、お前がいないことだけだ】

私はずっと、住みやすいと評判のこの街に来たかった。

だから図らずも、十年後、結果的にこの街にいる。

計画なんて、正直、忘れていた。

少し可笑しくて、メールを打つ。

【久しぶり。実は私も今、同じ街に住んでいます】

計画通りになりましたね。

——そこまで打つと、私はその文面を削除した。

公園を足早に通り抜け、一刻も早くこの場から立ち去りたいという
思いに駆られる。

今更、過去を蒸し返そうとは思わない。

私はずいぶん前に、秋穂という名前を捨ててきたのだから。

A D r o w n e d B o d y 6

乗り込んだ電車が新宿に近づくにつれ、私はチ力なのだという気持ちが強くなる。

今日もまた、指定されたホテルの一室で渡部が来るのを待つのだ。

一人でチェックインするのにも、もう慣れた。

部屋に入るとすぐ、シャンパンとフルーツのルームサービスが届けられる。

私は黄金色の液体を自らグラスに継ぎ足し、辛抱強く彼の到着を待った。

「悪い、今日は行けない」

渡部はいつも、用件を率直に伝える。

チェリーが漬かりきった頃、電話のベルが鳴った。

「仕事が片付かない。徹夜になりそうだ」

私は低く透き通ったその声を聞きながら彼の顔を思い浮かべる。

「いつもどおり、朝までそこを使ってかまわないから」

電話の向こうで、静かな雑音が聞こえてくる。

パソコンのキーが高速で打たれる音。

書類が高速で捲られる音。

足早に通りすぎる靴音。

「大丈夫。お仕事、しっかりね」

彼は私の言葉に満足したように電話を切った。

甘える女は嫌いだし。

自分を甘やかそうとする女も嫌い。

感傷に浸るような女も、きっと彼は嫌いだろう。

チェリーの炭酸を舌で絞りながら、私はそんなことを思う。

口の中がチクチクして、現実に取り戻されるような感覚を味わう。

私は何度も何度も、炭酸に浸されたフルーツを口に入れる。

その不確かな感覚を求めて。

【ごめん、迷惑だったよな】

ソファでうつらうつらしていると、メールが届く。

【本当に秋穂だって確認もしていないのに、色々メールしちゃって】

シャンパンは卓上で炭酸が抜けて、綺麗な黄金色に輝いている。

どこか懐かしい色。

私はそれを、生まれた町の川辺にあるススキの絨毯に見た。

夕暮れに染まるススキが、風にそよぐ音。

風を切る、二人乗りの自転車。

私は純也の後ろ、彼の腰に手を回していた。

延々と続く川沿いの道を、夕日に向かって帰っていた。

【もう、こんなメールはやめるよ】

彼は今、どんな顔をしているのだろう。

音もなく雨が打ちつけられている窓を見やりながらそう思う。

【ごめん。ありがとう】

二人で見たススキの絨毯。

シャンパンゴールドに染められた。

ひどく暖かい風景。

私はそのとき、心の底から笑っていた。

純也の体温を頬に感じながら、二人でどこまでも一緒に行くのだと思っていた。

【お返事、遅くなりました】

私は気がつくと、そんな出だしのメールを純也に送り返していた。

A Drowned Body 7

【残念ですが、私は秋穂という人ではありません】

咄嗟で、考えるよりも自然に返信を送っていた。

胸が高鳴って、自分が何に期待してこんなことをしてしまったのか見当もつかなかった。

しばらく経って、私はただでさえ長い夜をさらに長くしてしまったことに気づいた。

返信はなかなか来なかった。

もう来ないのかも知れない。

来なくても、何も不思議ではない。

むしろ来ないほうが当たり前の気がした。

なぜなら、純也の中で私はもう、秋穂ではないのだから。

半ば諦めたときだった。

【じゃあ、あなたは一体、誰なのですか？】

純也の問いは、核心を突いていた。

【私は、ハルナといいます】

私は、自分の体内に新たな人格が生まれるのを感じる。

【秋穂とお知り合いですか？】

【いいえ、初めて聞いた名前です】

【では、なぜこのアドレスを？】

【質問の意味がわかりません】

【これは秋穂が使っているアドレスのはずなんです】

【どうして？】

私は純粋な疑問をディスプレイに打ち込む。

【僕たちがまだ携帯電話を持っていなかった頃、話していたものと同じなんです】

【どうということ？】

【いつか携帯電話を持ったら、このアドレスにしようと話していたものと、同じなんです】

携帯電話のアドレスなんて、初期設定のときに一度変えたきりだ。

電話本体は何度も替えたが、アドレスは確かに変更した覚えがない。

どうしてそのアドレスにしたのかまでは覚えていなかった。

きっと私は純也とのやり取りで話していたアドレスに無意識ながら変更したのだろう。

私が忘れてしまっていたことを、純也が覚えていたということか。

【残念ながら、偶然の一致というものだと思います】

それからまた、しばらく時間が経った。

私はソファに膝を立て、毛布に包まりながら返信を待ち続けた。

時折、気の抜けたシャンパンから、かすかに炭酸の泡が浮き出た。

純也との思い出が頭の中で少しずつ蘇ってくる。

私の人生の中で、もっとも残酷で、もっとも純粹だった時代。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3065y/>

A Drowned Body

2011年12月2日18時54分発行